

## 山鹿灯籠民芸館

「灯籠」として知られる伝統的な紙製の提灯は、山鹿の歴史や文化にとって不可欠な一部であり、町中で見ることができる中心的なモチーフである。山鹿灯籠民芸館を訪れる人々は、「灯籠」を鑑賞し、これを制作するために必要な丹精込めた職人技について学ぶことができる。

### 古来の起源

紀元後 1 世紀から 2 世紀の伝説の景行天皇が九州地方を訪ね、景行天皇の一行が菊池川沿いを進んでいるときに深い霧に出くわしたと言われている。行く手を阻まれた景行天皇を助けようと山鹿の人々が松明を掲げた。このエピソードを記念して、村民が掲げた松明を「灯籠」で表し、年に 1 回山鹿灯籠まつりが開催される。

### 山鹿「灯籠」の技術的側面

その内樹皮が「和紙」（伝統的な手漉き紙）の生産に使用されるカジノキがこの地域で栽培されていたことから、山鹿では紙製の提灯作りが盛んになった。職人たちは紙工芸の技能を地域住民の間で継承し、代々受け継いできた。山鹿の軽量の「灯籠」は、数多くの「和紙」の細長い紙切れと少量の糊を組み合わせて作られる。8 月に開催される山鹿灯籠まつりでは、金「灯籠」や銀「灯籠」を頭にのせたおよそ 1,000 人の女性たちが、同時に踊りを舞う。

### 多岐にわたる形、徹底したものづくり

「提灯」と聞くと、1 つの形状または形を思い起こすが、山鹿「灯籠」のデザインは多岐にわたる。山鹿灯籠民芸館で展示されている「灯籠」には、八千代座、山鹿灯籠民芸館、有名な神社仏閣など実際に存在する建物の精巧な建築模型もある。また、現代の文化や社会を反映した変わり種「灯籠」の展示も行われている。

大きな「燈籠」になると、数か月にも及ぶ細かい作業が必要となる。この専門的な工芸を習得するには、長年に及ぶ修練、徹底した取り組みが必要となるため、現在では、提灯作りにおいて活躍している師は 10 人足らずとなっている。

### 歴史的建物における文化アーカイブ

山鹿灯籠民芸館には、これまでの山鹿灯籠まつりの写真やポスター、提灯作りで使用される道具なども展示されている。これらにより、この工芸や展示されている提灯の歴史的・技術的背景が分かる。また、さまざまな年齢、経験レベルのための工芸ワークショップが行われており、参加者は「灯籠」を作り、持ち帰ることができる。

山鹿灯籠民芸館の建物は、大正時代（1912-1926）に建てられ、以前は銀行が入っていた。ロマネスク風建築と内部構造の多くの特徴が、今日まで原形を保ち続けている。2002年、この建物は、有形文化財として指定を受けた。